

美濃路まちづくりレポート

ネットコミュニケーター 藤澤 徹

江戸時代、江戸と京都を結んでいた中仙道。「美濃路」は、東海道熱田宿から中仙道垂井宿をつなぐ軍事上、政治・経済上からも重要な幕府直轄の街道であった。現在、かつての「美濃路」のにぎわいを取り戻し、また歴史的街並みを保全することなどを目的として、行政・市民が手を取り合いさまざまな「まちづくり」が検討・実践されている。美濃路に関する動きは広域であるが、今回は、名古屋(西区)～清須市における活動の実態を報告する。

「美濃路まちづくりの取り組み」

美濃路は、信長・秀吉・家康の三英傑にまつわる史実から、多くの歴史ロマンを馳せることができる。街道を散策するとそれらにまつわる、さまざまな物語を発見することができる。一方で、マンション等の建設、区画整理に伴い、やや存在がぼやけていることも確認できる。

昨年まで美濃路は、名古屋(西)・西枇杷島町・新川町・清洲町と四市町をまたがっていたが、市町村合併における新清須市の誕生により、一市における存在となつた。これまでに各市町においていくつかのまちづくり団体が存在している。なかでも平成十年に発足した、「美濃路まちづくり推進協議会(以下推進協議会)」は愛知建築士会名古屋西支部を中心に、地元商工会や商店組合よって設立された民間団体である。当団体は名古屋城から清洲城までに残された歴史的町並みを活用し、史跡等を掘りおこし文化に包まれたまちづくりに取り組んでいる。

同様の事例は全国の歴史的な町並みが残る地域で見られる。美濃路の場合は一町の町並みが、一地域に存在しているわけではなく、広域に点在している。それゆえに美濃路としての発信力は弱く、観光資源としての意識は行政・市民ともに弱

い。推進協議会ではこれまでに、美濃路ウォッシングマップの作成、ホームページの開設、新川橋、一里塚デザイン提案、美濃路説明板の設置などを、行政との連携により実践してきている。平成十四年五月に美濃路沿道の町家型家を借上げ、まちづくり活動の拠点となる「みのじ館(やかた)」を開設した。行政側も美濃路まちづくり一市連絡会議(名古屋・清須市)をもとに当団体と連携し仕掛けてきている。



新たにオープンした美濃路ポータル
http://www.minoji.jp

「町並み存続させていく意味」

町並みを保存して活用する活動はまちづくりの柱になりやすい、しかし一方で、

活動自体が目的化され、活動の意味自体が薄れがちになるケースも多々ある。まちづくりの成果とは何か、それは決して「町並みが保存された」ということではない。保存活動を通して沿線地域の住民がより住みよい空間を手に入れる、かつてはどの地域でも存在していた、「コミュニティ」の再生にある。

美濃路では推進協議会のほかにも「枇杷島のじ会」「にしび町家地区まちづくり協議会」といった団体がある。いずれも行政との連携をもとにまちづくりを実践してきている。それぞれの活動も、年を重ねること外部発信力を増し、充実してきている。最近ではそれらの成果としてシンポジウム等の開催が増えてきており、会では美濃路をシンボルとしたコミュニティの活性化を訴えてきている。住民が安心して住むことができる場づくり、それが趣旨である。

美濃路まちづくりにおいて、町並みが消えていくことの意味することは何であるのか、かつての賑わいを取り戻していくには何が必要であるのか。行政側と団体がいかに連携していくか、今後の動向に注目したい。



推進協議会が提案している歴史的雰囲気を残した新川ポケットパーク(仮称)

まちづくりとIT

ネットコミュニケーター 藤澤 徹

今年度、「ユーキャン流行語大賞」にもトップ10入りした「ブログ」。代表される機能の「トラックバック」などはいろんな意味で、まちづくりのなかでかなり前から実践されてきているコミュニケーション技術である。

「つながるといふ技術」

一九九〇年代の初頭から急激な発展を遂げたインターネット(IT)技術は、説明を要らずして全世界のスタンダードとなっている。それらの技術を活用して、九〇年代後半から多くのベンチャー企業が登場し、現在の世の中の構図を作っている。いまでは、さまざまな産業において技術は適用されており、効率を図ることができ、インフラが整った産業は成功を収めている。

さて、まちづくりにおけるITの歴史を紐解くと、インターネットの商用化当初からさまざまな実践がなされており、実用化はむしろ早かったほうである。インターネットの面白さは人とつながるところにあるというのが周知である。ブログでは自身の意見のキーワードごとに「誰か」とつながることができ、議論できるシステムが整っている。まちづくりではワークショップというコミュニケーション技術が計画に適用されるケースがあるが、まさにこのワークショップの「コミュニケーション技術こそ、つながるといふ技術」の本質なのである。

参加する市民の意見を集約してアウトプットさせていくファシリテートは、まちづくりを実践していく人間にとって不可欠である。九〇年代藤沢市市民電子会議室は自治体と市民のつながる機能をもった双方向のシステムであった。運営はファシリテート技術を持った人間がコミュニケーションの場を管理するものであ

BLOG

る。その後、さまざまな自治体が双方向のコミュニケーションの場を実践してきた。一方でつながりやすいというところにさまざまな問題を抱え、発言の信憑性や顔の見えない匿名性などから、健全な場づくりには管理人の負担も大きかった。その後さまざまなシステムが生まれたが、進化したソーシャルネットワークキングシステム(SNS)として招待制、つまり「閉じた場」でありながら、顔の見える信頼関係を担保していることが大きな特徴のMyx はいまや三十二万にも会員を獲得している。

「マッチクラーによる応用」

コミュニケーションの場としてネット空間の活用はいまや公然化してきているが、健全な場として成り立っていくには適切なコミュニケーションの技術をもった人間が必要となる。まちづくりの場において客観的な洞察やアドバイスを実践できるマッチクラーはさまざまなネットシーンでも活躍できるであろう。

さて、まちづくりとITとはリンクしていくものであるが、まちづくりから新しいビジネスは生まれていない。むしろそのコミュニケーション技術は他分野で応用され違う形で成果を生んでいるといえる。今、多くの若い世代が違つ分野でITを活用して社会的地位を獲得している。そろそろまちづくり出身者が獲得する番ではなからうか。